

第七章 小児科プログラム

1. 研修の特徴

小児科は小児二次救急中核拠点病院、認可された NICU をもつ地域周産期医療センターである。東胆振・西日高地域の広域中核病院であることを最大限に利用して、一般総合診療、特殊・専門医療、救急医療、新生児医療、社会医学、障害児医療などを総合的に研修する。

2. 研修プログラム

1ヶ月以上を基本的研修期間とするが、研修期間の長短を考慮したうえで「到達目標」を達成できるよう指導する。

研修は、当科で定める「初期研修医の業務規定」に則り、「苫小牧市立病院小児科研修医マニュアル」に記載されている疾患を対象に病棟指導医のもとで主治医として研修する。

研修プログラムに含まれる項目

(1) 病棟研修

(総合診療，チーム医療，安全管理，基本的診療（診断・検査・治療）手技，病棟感染症，薬物の小児用量・使用法，補液療法，新生児・未熟児医療，マスキング，高次医療)

(2) 外来研修

(プライマリ・ケア，common disease とくに発疹性疾患，乳幼児健診（成長と発達健康児の観察），保護者の心理の把握・育児支援，予防接種と健康相談)

(3) 救急医療（夜間）

(小児救急疾患の体験，応急処置・救急対処法の判断と手順，他科医との連携)

3. 週間予定

	月	火	水	木	金
7:50～			抄読会・症例検討会		
8:20～	カンファレンス				
午前	病棟研修				
午後	病棟研修・外来研修・乳幼児健診・予防接種				
17:15～22:00	救急外来研修				

3. 研修目標

1) 一般目標

①小児の特殊性を学ぶ

- ・ 病棟研修において、広域中核病院小児科の小児の入院疾病構造を理解し、病児・家族の心理と社会背景を考慮した治療計画をたてる。
- ・ 成長・発達の知識獲得を乳幼児健診、外来実習で習得する。
- ・ 新生児の新生児期の生理的変動を新生児回診、NICU 実習で理解する。
- ・ 救急外来実習で小児の救急の疾病構造の理解と対処法および保護者への対応の重要性を理解する。

②小児診察の特殊性を学ぶ

- ・ 主たる医療面接が保護者（母親）であること。
- ・ 年齢に応じた診察が必要であること。

③小児疾患の特殊性を学ぶ

「苫小牧市立病院小児科研修医マニュアル」に載せてある疾患を中心に研修する。

2) 経験目標

①診察

- ・ 小児の全身観察から、その動作・行動、顔色、元気さ、発熱の有無、食欲の有無などから、正常な所見と異常な所見、緊急性について把握し提示できる。
- ・ 視診により顔貌と栄養状態を判断し、発疹、咳、チアノーゼ、脱水の有無を確認できる。
- ・ 発疹の児ではその所見を観察・記載し、日常しばしば遭遇する発疹性疾患（麻疹、風疹、突発性発疹、溶連菌感染症、水痘など）の特徴の把握と鑑別ができるようになる。
- ・ 下痢の児では、便の性状（粘血便、水様便、膿性便など）、脱水症の有無を説明できる。
- ・ 嘔吐や腹痛のある患児では重大な腹部所見を抽出、病態を説明できる。
- ・ 咳を主訴とする病児では、咳のでかた、咳の性質・頻度、呼吸困難の有無とその判断の仕方を修得する。
- ・ けいれんを診断できる。またけいれんや意識障害のある病児では、大泉門の張り、髄膜刺激症状の有無を調べることができる。
- ・ の有無とその判断の仕方を修得する。
- ・ けいれんを診断できる。またけいれんや意識障害のある病児では、大泉門の張り、髄膜刺激症状の有無を調べることができる。

③基本的手技

※小児ことに乳幼児の検査および治療の基本的な知識と手技を身につける。

・必ず経験すべき項目

単独または指導者のもとで乳幼児を含む小児の採血、皮下注射ができる。指導者のもとで新生児、乳幼児を含む小児の静脈注射・点滴静注ができる。

④薬物療法

※小児に用いる薬剤の知識と使用法、小児薬用量の計算法を身につける。

- ・小児の体重別・体表面積別の薬用量を理解し、それに基づいて一般薬剤（抗生物質を含む）の処方箋・指示書の作成ができる。
- ・剤型の種類と使用法の理解ができ、処方箋・指示書の作成ができる。
- ・乳幼児に対する薬剤の服用法、剤型ごとの使用法について、看護師に指示し、保護者（母親）に説明できる。基本的な薬剤の使用法を理解し、実際の処方ができる。
- ・病児の年齢、疾患などの応じて輸血の適応を確定でき、輸血の種類、必要量を定めることができる。
- ・乳幼児の鎮静法について習得する。

⑤予防・保健医療について

- ・予防接種の種類、接種時期、実際の接種法、接種後の観察方法、副反応、禁忌について学ぶ。
- ・発疹性疾患の学校保健法による登校停止について理解する。

⑥小児の救急医療

小児に多い救急疾患の基本的知識と手技を身につける。

(A：必ず経験すべき疾患， B：経験することが望ましい疾患，

C：機会があれば経験する疾患)

- 1) 脱水症の程度を判断でき、応急処置ができる。(A)
- 2) 喘息発作の重症度を判断でき、中等症以下の病児の応急処置ができる。(A)
- 3) けいれんの鑑別診断ができ、けいれん状態の応急処置ができる。(A)
- 4) 腸重積症を正しく診断して適切な対応がとれる。(B)
- 5) 虫垂炎の診断と外科へのコンサルテーションができる。(B)
- 6) 酸素療法ができる。(A)
- 7) 気道確保、人工呼吸、胸骨圧迫式心マッサージ、静脈確保、骨髄針留置、動脈ラインの確保などの蘇生術が行える。(B)